

障がい学生支援（後期）

はじめに

今年度後期の障がい学生支援スタッフの活動では、視覚・聴覚障害学生への直接的な支援や、間接的な環境整備について取り組んできました。ここでは主な活動内容をご紹介します。



パソコンテイクによる情報支援の実施

聴覚障がいのある学生への情報支援として後期も遠隔情報保障システムであるcaptiOnlineを用いてパソコンテイクを行いました。後期は、講義や研究室、小グループでの情報支援も含めるとおよそ約100時間程度の通訳を行いました。前期には独り立ちすることが難しかった1年生も、後期になると立派に一人前、学部や大学院生の先輩たちと共に積極的に支援活動に関わる姿は次年度に向けて、とても頼もしい姿に映りました。

点字書籍の製本作業／書籍の電子書籍化作業

視覚障がいのある学生が用いる点字書籍の製本や、書籍の電子化データの作成を行いました。こちらは、点字ユーザーの学生の場合には、「サピエ」の書籍の印刷したものの製本作業などを補助しました。サピエとは、視覚障がいのある人を始めとする目で文字を読むことが困難な方々に対して、さまざまな情報を点字、音声データ

などで提供するネットワークであり、視覚障がいのある人にアクセシブルな書籍が多く登録されているサービスです。

また、書籍の電子書籍化作業では、読書バリアフリー法という制度が近年国内において制定されましたが、この運用に準拠した形で、書籍をOCR（画像データのテキスト部分を認識し、文字データに変換する文字認識機能）にかける作業を行いました。そのままでは読むことが出来ない弱視の学生などでも、機械の音声読み上げを使うことや、PDFを再生するアプリを使うことで拡大して読むことが出来るようにするものです。作業の際には、実際の盲学校での教科書の使い方や点字の読み方、それから弱視における見え方などについてのレクチャーを受ける中で、よりその必要性を感じながら作業ができました。

バリアフリーチェックの開催

2022年2月17日に南大沢キャンパスにて、学生支援スタッフ主催のバリアフリーチェックを行うことになりました。当日はキャンパス内にあるトイレや通路のバリアフリーチェックをする中で環境改善、そして学生支援スタッフの日々の生活におけるダイバーシティな感性の向上が大きく期待されます。ご関心のある方はぜひHPをご確認いただければと思います。

おわりに

このほかにも、学生支援スタッフ自らの自己研鑽の場として、「大学生のための手話はじめ」や「聴覚障害学生支援実践事例コンテスト2021」（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan））に出展するための動画作成など、幅広い活動を行いました。これらの取り組みに関心のある方は、是非ダイバーシティ推進室までお問い合わせください。（益子）



TMU
DIVERSITY
PROMOTION
OFFICE



No.30 January 2022 Newsletter ダイバーシティ通信



2021年度 セクシュアル・マイノリティ講演会

同性パートナーシップの現在地



2021年12月3日（金）に、公益社団法人 Marriage For All Japan 代表理事で、同性婚の法制化を求める「結婚の自由をすべての人に」訴訟に携わっている弁護士寺原真希子氏を講師に迎え、同性婚の法制化をテーマとして講演会を開催しました。

師自身がこの問題に取り組む意義を起点に、マジョリティがこの問題に取り組む、声をあげることの重要性が伝えられました。最後に、当事者カップルとその二人を撮影した写真家が同性婚の法制化を求めるメッセージを伝える動画を上映して、参加者との質疑応答ののちに閉会となりました。

対面・オンラインを合わせ63名の参加者からは、「同性婚に関する情報は断片的にのみ知っていたので、このような講演はとてありがたかった。同性婚をめぐる積極的な活動が全国規模でなされているということや、同性愛への否定の大部分が、単なる理解不足や理解しようとする態度の不足によるものだと知ることができた。また、裁判で国がどんな意見で同性婚の制度化に反対しているのかを知る良い機会だった。」「いわゆる同性婚訴訟の判決文は読んだことがありますが、第一線で戦われた先生のお話を直接伺うことができ、より温度を感じることができました。」「同性パートナーシップ制度についてあることは知っていても、どんなものなのか詳しく知りませんでした。どこか他人事のように思っていたのではないかとハッとさせられた講義でした。思い返せば私も自分では無意識的に同性愛の考えに偏ってしまっていたと思います。これからは実際に自分の身の回りの人にも対話の輪を広げていきたいです。」などの感想が寄せられ、本講演を通じて同性婚をめぐる課題について、多くの参加者がより身近に感じてくれたことがうかがえました。（藤山）



Contents

1 2021年度セクシュアル・マイノリティ講演会
「同性パートナーシップの現在地」寺原真希子氏

2 東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
オンライン見学会
手話講習会【中級】

寄稿「4年間を過ごした第二の家！」

3 ミニレクチャー
「よるダイバー」

「大学生のための手話はじめ」5Gイベント参加
～VRの体験～

ボランティアセンター講演会
「Ontenna」情報支援協力

コラム「ダイバーシティとスポーツ」

4 障がい者支援スタッフの活動

コラム「ダイバーシティ・ブックレビュー」

コラム ダイバーシティ・ブックレビュー（ダイバーシティ推進室 特任研究員：藤山新）



ベル・フックス（2003=2020）『フェミニズムはみんなのもの』エトセトラ・ブックス

「フェミニスト」と聞いて、皆さんはどんな人物を想像するでしょうか。多くの場合、「女性」をイメージするのではないのでしょうか。しかし、私はフェミニストであるために性別は関係ないと考えています。性別を理由にした不当な取り扱いに疑問を抱く・反対する人のことをフェミニストと言うのではないのでしょうか。

その思いを強く抱くようになった大きなきっかけが、本書でした。フックスは「フェミニズムとは、性にもとづく差別や搾取や抑圧をなくす運動のことだ（p.8）」とフェミニズムを定義しています。そのうえで、フェミニズムが目指すものを「支配をなくし、自由にあるがままの自分になること（p.181）」と説明し、「だからこそ、フェミニズムはみんなのものなのだ。（p.181）」と呼びかけています。

大学院生だった当時の私は、この言葉に感銘を受け、男性である自分がジェンダーをテーマに研究活動を続けていくことにひとつの自信を持つことができました。ベル・フックスは惜しくも2021年12月に亡くなりましたが、本書をはじめとした著作からは、今日にも通じるいくつもの問題意識を読み取ることができます。ジェンダーに関心を持った方、性に関するもやもやのある方には、ぜひフックスの著作に触れていただければと思います。

編集後記

先日、ローカル5G環境活用実証フィールド提供事業の一環として、ARマップ用の室内撮影をダイバーシティ推進室で行いました。これからますます5G環境が進んでいく中、最先端の取組みを体験できると言うワクワクしますね！（兼子）



東京都立大学 ダイバーシティ推進室
〒192-0397東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線 2571 FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2022年1月31日



編集・発行

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」オンライン見学会

待機児童が大きく減少したとはいえ、特に年度の途中から保育園に入ることは難しいもの。そんな時にお役に立つのが、本学の学生・教職員のお子さんを対象とした一時保育施設「都立大KIDS」です。

2021年9月3日(金)に、都立大KIDSのオンライン見学会を開催しました。すでにお子さんがいて都立大KIDSの利用を検討している方や、将来的な子育てを計画している方など、さまざまな立場からのご参加をいただきました。

参加者全員の自己紹介から始まった見学会は、和やかな雰囲気のなかで行われました。一時保育施設の様子を紹介した動画を上映したのち、施設長の吉池先生から一日の保育の流れと施設の概要が紹介されました。続いて、都立大KIDSを利用している保護者の方からの体験談が紹介された後、参加者との質疑応答が行われました。質疑では、施設の利用費やお弁当の準備の有無など実際の利用にかかわる事柄や、平均的な利用状況や先生方が保育の際に心がけていることなど、園の様子が詳しくわかるような質問が活発に飛び交い、にぎやかな雰囲気の

うちに見学会は閉会となりました。

都立大KIDSの見学や体験保育は随時募集していますので、ダイバーシティ推進室、または学長室までお気軽にお問い合わせください。(藤山)



ご利用には事前登録が必要です。詳細はWEBサイトをご覧ください。
 東京都立大学ダイバーシティ推進室 一時保育施設のページ
<https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html>

手話講習会【中級】(全8回:10月15日から12月17日まで開催)



前期の手話講習会初級コースに続き、後期は中級コース(9名受講)を開催しました。前期から受講する学生に加えて、今年度は1名、後期から参加する学生もいました。前期から引き続き、プレミアムカレッジ生や本学の教員もあり、幅広い参加がありました。

中級コースでは、日常会話レベルの手話の取得を目指しつつ、前期に受講生からも話に挙がっていた、日々使う用語(電車や地域の名前)も扱いました。またハイブリッド講義の形式での受講となりましたが、多くの学生が教室に来て学んでいたため、全体的に習熟度が高かったです。最終日の地域のろう者との交流会でも、手話の読み取りが円滑であり、「伊勢神宮に行ったけれど、工事中で見ることが出来なかったんだよ

ね」といった普段は話さないような手話表現も理解する受講生がおり、講師の先生も驚いていました。

受講生からは、「実際にろう者と触れ合う中で、読み取れるところもある反面、もっとこのことについて話したい、あのことについても、と思ったときに伝えることが上手くできなかったのが悔しかった」といった感想もあり、充実した学びを得ることが出来た様子でした。手話講習会が終わってしまうと日常で手話を使う機会が減ってしまいますが、次年度以降も学習が継続できるように様々な取り組みを行っていきたく思います。(益子)



「4年間を過ごした 第二の家」

サークルなどに多くの時間を割いていた私にとって、ダイバーシティ推進室は第二の家のような存在でした。ひと息つきたいと訪ねるといつも皆さんが優しく迎えてくれて、肩の力を抜いてお話を聞ける時間が忙し日々の安らぎでした。

1年生の私は、「社会福祉学に関心があるのに『障がい』について全く知らない、もっと知りたい」という思いから支援スタッフに登録しました。しかしさまざまな講習会で知識をつけるほど、障害のことや相手のことを「(知識を学んで)理解する」という当初のゴールに違和感を覚え、今自分が関わる目の前の人との日々のコミュニケーションを大切にしたいと思うようになりました。(今思うと当たり前なのかもしれませんが、)

4年間を通して、「障がい者」「健常者」のフレームを外して一人ひとりの「人」として魅力的な多くの支援スタッフ・職員の方々に出会えたことが、本当に幸せでした。たくさんお世話になった一方で自分がかお返しができたかという、あまり自信を持ってないのが唯一の後悔です。これから働く中で、ほんの少しの力ですが、得た経験・学びを社会に還元できたらと思っています。そして図々しくも、こんな関わり方もできてほしいと思っています。これからも安らぎと学びとお菓子のあるダイバーシティ推進室が、たくさんの方の家にありますように!



障がい者支援スタッフ
 人文社会学部人間社会学科
 4年 宮本明日花

ミニレクチャー「よるダイバー」



男女共同参画、障がい、文化的多様性、セクシュアル・マイノリティなど、「ダイバーシティ」にかかわるさまざまな事柄について、広く学び、語り合う「よるダイバー」。

後期は対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。今期は、発達障がいのある学生が自身の障がいについて語る回や、福祉と防災をテーマに研究を行っている学生が自身の研究成果を紹介する回などもあり、前期よりもさらに広い視点から学びあう場となりました。また、参加者も学生だけではなく、教員や職員、さらにはプレミアムカレッジの受講生などさまざまな立場の方が参加し、そうした点でもダイバーシティを実感することができる場となりました。全8回のプログラムを通じて、ディスカッションや質疑応答など、多くの参加者が主体的にかかわる場面も多くみられました。

最終回の後には、希望する参加者がオンライン上で交流する時間が設けられ、よるダイバーに参加したきっかけや、今後のよるダイバーで取り上げてほしいテーマなど、自由に語り合う時間を過ごしました。コロナの影響で、参加者同士の直接的な交流が難しい状態が続いていましたが、ごく一部とはいえ、気軽に話ができる交流の場を作ることができたかと思います。この企画全体を通じて、ダイバーシティ推進室が多くの人の協力によって成り立っていることを、改めて感じることができました。(藤山)

よるダイバー 2021 後期 コンテンツ

- 10月15日 セクシュアル・マイノリティの視点で振り返る東京オリパラ / 講師: 藤山新
- 10月29日 障がい学生支援と権利条約 / 講師: 益子徹
- 11月 5日 働くこととジェンダーと / 講師: 藤山新
- 11月12日 発達障がいの立場から見た障がいとその日常 / 講師: 都立大学部生
- 11月26日 障がいと防災～福祉と防災の境目を超えよう～ / 講師: 都立大院生
- 12月 3日 文化的多様性に関わる取組のアイデアについて / 講師: 藤山新
- 12月10日 「森発言」とその後の展開 / 講師: 藤山新
- 12月17日 振り返りと次年度の活動について / 講師: 益子徹

このガイドラインの大きな特徴としては、MtFトランスジェンダーの選手やテストステロン値の高い女性選手が「性別に起因する不公平な優位性」を得ているという前提で排除されるべきではない、この姿勢を明確に示している点にあります。したがって、このガイドラインに基づいて各競技団体が参加のためのルールを検討することは、スポーツにおける diversity and inclusion を実現する営みになると言えるでしょう。MtFトランスジェンダーの選手やテストステロン値の高い女性選手を競技から排除するのではなく、いかにすれば参加が可能なのかという困難な問いに対して、スポーツ界がどのような解答を示すことができるのか。今後の動向が注目されます。(藤山)

「大学生のための手話はじめ」5Gイベント参加～VRの体験～

現在本学では、東京都が策定した『「未来の東京」戦略の取組の一環として、キャンパスに整備した日本最大級のローカル5Gを活用する「東京都立大学ローカル5G環境活用実証フィールド提供事業」を実施しています。

この活動の中で、2021年12月15日(水)に、当室が主催する「大学生のための手話はじめ」(講師:益子徹)という手話講座を、VRで行う実証実験を実施しました。当日は、日々のメンバーに加えて、システムデザイン研究科の大学院生もこのイベントに参加しました。いつも参加している学生たちからは「いつもと比べて周りに遠慮をしないで、みんなが手話の模倣ができるところが良いと思う」「近い距離でもっと映ったら、いろんな角度から覗くことが出来て、もっと手話が見やすいと思う」などの発言もありました。また初参加の大学院生からは「手話は眉の動きなども大事だという事なので、VRの装置で眉の動きのセンサーなどができるといいと思う」といった自身の研究と関連付けた感想が寄せられました。

このことは、このイベントがダイバーシティの推進だけではなく、学生の研究活動における新たな発想や気づきにつながったことを示しています。

今後も当室においてイベントを開催することで、障がいのある学生を支援することはもとより、学生の本分である学修や研究に対しても、刺激を与えることができるような機会を増やしていきたいと思えます。(益子)



ボランティアセンター講演会「Antenna」情報支援協力

2021年11月28日(日)に行われたボランティアセンターによる「オンラインで学び、考えよう!『音をからだで感じるデバイス『Antenna』の開発と社会実装』」という講演会において、聴覚障がいのある方が参加することから、パソコンテイクによる支援協力を行いました。普段、複数名に向けた通訳経験がほとんどない学生支援スタッフですが、「全体通訳と個人への通訳の違いを意識することは難しく、今回体験できたことはとても勉強になった」といった感想がありました。

これからも、学内で行われる多くのイベントに聴覚障がいのある方が参加することが予想されることから、全体に向けての通訳の練習も、今後少しずつ行っていきたくと思えます。(益子)

コラム

ダイバーシティとスポーツ

2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックにおいて、数名のトランスジェンダーの選手が競技に参加しました。特にMtF(男性として生まれながら女性のアイデンティティを持ち、女性として生きている人)選手の競技参加をめぐる、賛否を含めたさまざまな意見が聞かれました。

これまで、IOC(国際オリンピック委員会)は性自認の宣言とテストステロン(男性ホルモンの主成分)の分泌量を一定値以下に保つことの2点を条件として、MtFトランスジェンダーの選手が競技に参加することを認めていました。しかし、東京オリンピックでの議論やそのほかの動向を踏まえ、2021年11月にトランスジェンダーの選手やテストステロン値が高い女性選手の競技参加について、10項目の新たなガイドライン(注1)を発表しました。今後はこれまでものようにIOCが一律に参加の基準を定めるのではなく、このガイドラインに基づき、各競技団体が参加のためのルールを検討することになります。

*1... (注1)「IOC Framework on Fairness, Inclusion and Non-Discrimination on the Basis of Gender Identity and Sex Variations」
https://stillmed.olympics.com/media/Documents/News/2021/11/IOC-Framework-Fairness-Inclusion-Non-discrimination-2021.pdf?_ga=2.217410320.704352228.1640224930-1428919400.1637212731